

## テーマ⑥ 介護福祉士の倫理について

—「倫理」という言葉をよく耳にするのですが、介護福祉士の倫理とはいったい何を意味するのでしょうか？ お話してください。

介護福祉士の倫理というのは、社会福祉士及び介護福祉士法という法律や日本介護福祉士会の倫理綱領があります。秘密を保持しなさい云々……と、それは読んでもらえばわかります。その解釈をここでする必要はないと思うので、そうでない話をします。

つまり法律や日本介護福祉士会の倫理綱領の根本、その裏側にある「倫理とは何か」というお話です。それが専門性につながります。

「倫理学」という学問があります。ほとんどの方は勉強されたことがないと思います。私はかつて勉強しました。外国にも、『社会福祉の倫理』という本があります。チャールズ・S・レヴィ<sup>\*2</sup>という人の書いたものが典型的です。これは日本でも翻訳が出ています。「倫理というものは価値の運用である」と書いてあります。価値の運用ということは、別の言い方をすれば、「価値に基づく行動指針というものを倫理という」という解釈なのです。だから、倫理、倫理と叫んだところで何も生まれません。倫理の奥に価値がある。人間の価値。その価値をどう運用するか。どのように行動に移すかというときに倫理という言葉が生まれる。

わかりますよね？ たとえば秘密を保持しなさいというのは、人は無断で他人の秘密を洩らすことができないという価値観です。人間の尊厳を保持するという価値観があるから、尊厳を保持するために個人として、また社会的にも必要な態度が求められるわけです。それについていちいち言ってもきりがありませんから、別の視点から言います。

早稲田大学の伴博<sup>\*3</sup>先生が、倫理の本を書いていまして、「一つひとつの行為がいかに『行すべきか』、『べき』の重みのもとで見られ、そのもとでの選択としての行為がある。それは主体たる人の重みである」といった論旨で論じています。

このことを最も適切に説明したのが、東京大学の和辻哲郎<sup>\*4</sup>先生でした。先生の著書に『人間の学としての倫理学』という本があります。これがまた難しく、なかなか理解できないのですがよく書かれています。私なりに理解したことは、倫理というのは、倫理綱領を読んだからと言って、そうなるというものではないのです。倫理というのは基本的には、「あなたはどんな人間になりたいですか」ということです。あるいは「どんな専門職になりたいんですか？」と問うことです。自己反省というか自己吟味というものが倫理の根本になければならない、法律に書いてあるから守るべきである、という「べき」論だけでは、私は倫理というものは十分に説明できたとは思いません。そのことをよく説明した



日本生活支援学会会長

黒澤 貞夫氏

のが和辻先生で、そのエッセンスを私なりにまとめると、以下のとおりです。

倫理というのは世間における間柄。私とあなたという間柄の関係である。人間というのは人之間と書きますね。人と人との関係によってはっきりとわかります。それは世間という、世の中の人の生活の営みの中から生まれる人と人との関係。人と人との間柄という関係においては、決して人を対象化してはならないということです。手段としてはならないということです。なおドイツの哲学者カント\*5は「決して他人を目的への手段として扱わないように行為すべきである」と論じています。たとえば、アセスメントされたとしてもそれはその人のニーズはあるからで、よく理解したいという気持ちがあるから、相手の了解のもとにアセスメントするのです。では、対象化しないということはどういうことなのか。それは主体としてみるということ。私も主体、あなたも主体である。主体というのは私自身であるということですね。これについては、マルチン・ブーバー\*6という人がたいへん有名な哲学書で「我と汝」IとYouという関係について書いています。私とあなたという関係。ところが検査・測定・診断という自然科学の世界ではIとItで、その場合は三人称なのです。どこが悪いのですか？ 検査しましょう。この物体はどんなふう動くのか？ 測定しましょうと対象化するわけです。では対象化してはならない、主体として付き合うには何が必要かという、和辻先生\*7がこう言っています。「自分を顧みることである」と。「自分がどういう人間であるかということを知ることである」。倫理というのはこうであると。このことは昔から議論されています。自己覚知、自己理解という言葉を使っていますので、介護福祉士の皆さんもよくご存じだと思います。

これは和辻先生\*8の論説を私なりにくわいて言うと、「人間は自分を客観的に見ることはできない。自分自身を自分が見ることはできない。見るということはどういうことか」と、私があなたに言ったことが還ってくることによって自分がわかる。反射するからわかる」と。したがってケアというのは相手に関わる仕事だから、相手から還ってくる問題を自分がよく吟味をして、自分自身をよく成長させることが倫理であることだと理解しています。それが和辻先生の倫理学です。

だから私は倫理とは、深い人間関係の基礎をなしている学問である。ただ人間とはこうしてはいけませんよ、といった簡単なものではない。ひと言で言えば、常に介護福祉士や他の職業は、私は私、あなたはあなたの主体をもった人間同士、別の言葉で言えば人格者同士のつきあい。そして自分を常に反省して、相手から還ってくることをよく吟味して自分を成長させていきなさい、と考えるのが倫理であるということです。これが学問的理解ですね。

## ◎ 引用・参考文献

---

\*2 倫理とは何かについて

『社会福祉の倫理』チャールズ・S・レヴィ著・B・ヴェクハウス訳（勁草書房：1983年）：特に8ページ

\*3 現代社会の倫理学について

『現代倫理学の展望』伴博・遠藤弘編（勁草書房：1986年）：特に3-4ページ

\*4 人間の問いとしての問柄について

『人間の学としての倫理学』和辻哲郎著（岩波書店：1934年）特に190-191ページ

\*5 カントの言う自律への尊敬とは何か

『人間哲学の名著』ナイジェル・ウォーバートン著・船木享監訳（ナカニシヤ出版：2005年）：特に149ページ

\*6 我と汝という全人格的な関係について

『我と汝・対話』マルティン・ブーバー著・植田重雄訳（岩波書店：1979年）：特に9-10ページ

\*7-8 自分自身を見るとはどういうことか

\*4：特に200ページ